

〔資料〕

妙幢淨慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題 (三)

阿部美香・大久保美玲・塚本あゆみ・関口静雄

〔解題〕

淨慧の周縁②

妙幢淨慧が獨湛性瑩と面識があり、その警咳に接していたであろうことは『佛神感應錄』後集卷十二¹所載「阿彌陀經讀誦ノ功ニ由金殿ニ積經ヲユメミル事」の一文からも十分に推量でき、高弟たちともよく交流していたように見受けられる。隱元隆琦の直弟子で、隱元にしがたって来日し、隱元の念仏禅をもっともよく受け継いだ獨湛性瑩に淨慧が示した関心の第一は禅淨双修のことではなく、獨湛の高弟自光から聞いた獨湛の見た夢の話だった。淨慧はたとえ厳しい修行を積んだとしても僧として持戒持律の正しい仏道修行をしていなければ天や仏菩薩から夢中に啓示や教誨は得られないと考えていたのであって、すなわち阿彌陀經読誦の功によって天から夢告を得た獨湛は僧として威儀正しい行業を果し得た僧であったと追悼したのである。

獨湛の夢の話に続いて淨慧は獨湛の行業数条を紹介し寸説を加えている。侍者無住道立・副寺石窓道鏗が編録した獨湛の半生記『初山獨湛禪師行由』と獨湛の高弟圓通撰『黄檗第四代獨湛和尚行略』を引いて、宝永三年(一七〇六)正月二十六日に七十九歳で逝った獨湛の遺偈「我有二句²。別³于大衆⁴。若問⁵何句⁶。不説⁷不説⁸。」を取り上げて、これを明国福州鼓山涌泉寺の曹洞僧永覚元賢(一五七八―一六五七)輯『繼灯録』巻第一に載る天目山の中峰明本(一二六三―一三三三)の遺偈「我有二句⁹。分¹⁰付大衆¹¹。更¹²問¹³如何¹⁴。無¹⁵二本可¹⁶據¹⁷。」と、また俄かの病を受けた杭州淨慈寺七十

六世無旨可授禪師が西に向って端坐し左右の弟子衆に「吾マサニ逝ナン」と云ったところ弟子衆から遺偈を乞われ、「吾宗本無¹⁸言説¹⁹。」と云い放って合掌し仏号を唱えて示寂したという所伝を挙げて、「併²⁰テ味²¹ベシ」と記している。

曹洞宗楊岐派の休庵無旨可授は明浄柱輯『五灯会元統略』巻一上「杭州淨慈無旨可授禪師」などによると火葬後も舍利の色が金銀水精のようで歯牙は不壞だったという清僧で浄土業を修したと伝えられ、臨濟僧中峰明本は『天目中峰和尚広録』などによると終生官寺に住まず到るところに幻住庵を構え、儒仏の調和と融合を主張し、また禅淨一体を説いて道俗を教化した浄土信仰者だったという。淨慧は中峰明本と無旨可授を浄土往生者と考えていたはずで、獨湛がそうした正念往生者、臨終に何の苦もなく安らかに終を取った者のことを来訪する道俗が語るのを聞いては侍者に命じて記録させ、各人に一偈を添えて輯したものが『浄土善人詠』であったとし、それは獨菴の『善人詠』に擬えて編まれたものと指摘している。獨湛はまたわが国の歴史僧伝において往生安養した緇素のことにすぐれたものを採り拾い集めた『扶桑往生寄帰伝』二巻を輯しているが、淨慧はこれを唐僧義浄(六三五―七一三)の『南海寄帰伝』に擬したものと指摘している。こうしてみると、淨慧は獨湛と同様に浄土往生者、ことに禅僧であって浄土業に精励した、すなわち禅淨双修の禅僧たちに深い関心を抱いていたことがわかる。⁴

※

淨慧はさらに『佛神感應錄』後集卷十二に「獨湛禪師行畧事²² 附²³ク日本國

「ニテノ 讖文ノ事」(目録は「トクケンゼンシキヤウリヤクヨヒホゴ 獨湛禪師行畧及本國ニテ讖文ノ事」)の項目を立てて獨湛の行業にふれている。獨湛の半生記『初山獨湛禪師行由』一卷は獨湛の自撰だといひ、獨湛を遠州浜松初山に招請した悟(語)石居士近藤登之助貞用や執事らの懇請によって獨湛みずから語った半生を門人の道立と道鏗が録出したものだと言記したうえで、これらをもとに獨湛の行業を略述している。その要を採れば、「獨湛は潁川の人で姓は陳氏。先祖の陳文龍は宋末に状元に及第し丞相位に至った人で宋が滅亡したとき節義を守って死んだが、子孫は元・明に仕えて代々冠纓の家柄だった。父は翊宣、母は黄氏。母は人となり至孝で股の肉を割いて親に供養し觀世音菩薩に帰依する深謹の人であった。獨湛はのちに『皇明百孝傳』を撰述し、股を割き墓に慮した孝子を三十四人載せているが、自分の母を漏らしている。それには言い難い事情があったのであろうが、獨湛がこの書を撰述したについては何か心に感ずることがあったからに相違ない。獨湛は幼児から秀異で、泥土を塑し木を刻して神仙仏像を造り、草実を串き数珠とし、跣坐念仏して終日晏然としていたので和尚子と呼ばれた。十六歳のとき積雲寺に投じて天童山の密禪師の法嗣衣珠和尚を剃髮の師として出家し、日々楞嚴經・法華經また高峰の語録、雲棲の著作を読んで座禪の要を得、さらに日夜跣坐して万法歸一を参究し、ある夜忽然とその道理を悟った。しかしそれだけに満足せず黄檗山に登って隱元和尚に謁し、また鼓山に登って永覺禪師に参じ、ふたたび黄檗に戻って禪堂に籠ること四年、天奇和尚の行実、中峰の広録を閲して感激した。そして庚午(二六五四)の夏、隱元にしたがって渡日したのである。」と略歴を示し、継いで獨湛の渡日前の逸話を紹介している。

それは獨湛が渡日前にひとりの仙人に乩したという所伝で、淨慧は「乩とは疑わしきをたずね問うことだ。高泉禪師の『山堂清話』によると、宋時代に木岩洞に陳搏、号を無煙と称した仙人がいたが、三山の鄭道人は符咒や桃の木をもってこの仙人を現実天降らせ人の吉凶を判ぜしめたというから、獨湛禪師が未来を問うたのはきつとこの仙人だったに相違ない。なお、獨湛禪師が仙人に乩して讖文を得たことは『初山獨湛禪師行由』に記載がない。獨湛禪師がかつて門人に語った話である。」と注記している。

すなわち淨慧は獨湛が仙人に乩して讖文を得たという所伝を、これをまた獨湛の門人から聞いたのである。その話の要を採れば、「湛師が仙人に乩したとき、仙人は湛師に『日輝^{ハカシヤキトウカイ}東海上^{トウカイ}一月在^ニ初山^ニ明^ニ』』という二句の讖文を示したという。湛師にははじめその詩の意味がわからなかったが、隱元老師にしたがって東海万里の波濤を望み凌いだとき、慧日が扶桑の枝に出耀するのを見て上句の意を理解した。しかし下句の意が解せなかった。それが渡海十年後の寛文四年(一六六四)、遠州の近藤悟石居士の招請によって浜松に赴き、禪刹建立を願う悟石居士の意を受けて領地を巡視したとき、溪石嶂樹の心にかなう山林があった。その名を問うと初山だという。湛師は愕然とした。かつて仙人から示された讖文の下句の初山の意が解せず十有余年のあいだ疑問を抱いていたが、讖文のいう初山がこの遠州浜松の初山の地であったことを確信したのであった。疑問は氷解し、仙人の讖文を信じた。」というもので、淨慧は『初山獨湛禪師行由』に獨湛が遠州の近藤悟石居士の招請に応じて浜松に赴き、近藤の宅内に寓し、六月六日採隱して初山に至ったことを「定縁」であったと自ら語っているのは、仙人に乩して得た讖文の初山が眼前の遠州浜松の初山と合致したことをいうのであると推解し、獨湛が開いた初山法林寺が今日に至るまで朝誦夜參が整然と行われていて垂化の勝藍となったのは獨湛の積徳の定縁であって、それはまた慈母孝信の余贖であったと讃している。獨湛の母は割股孝親の人であり觀音の信敬者であったし、悟石居士の夫人も觀音の篤信者であった。そして淨慧は、

湛師ノ母^{ハナハ}甚^ニ觀音ヲ信敬ス。悟石居士ノ夫人^{フカク}湊^ニ大悲ニ歸ス曾^{ヒトリ}懺禮シテ密^ニ手香ヲ燒ニ^{更ニ}アツカラザルコトヲ覺^{ヲホフ}燒^ク了^ク大悲ノ手掌ク^{ロク}熏リ。夫^{ヨリ}人ヲドロキ悲喜交^{ヒキ}生ズト云々。湛和尚遠州ノ行アルハ多^ク夫人ノス、メニ由^レトキ、シシカレバスナハチ慈母孝信ノ餘ノ慶ニシテ。觀音ノ冥應トイハンモ不可トセジ

と『初山獨湛禪師行由』『黄檗第四代獨湛和尚行略』に見えぬ獨湛の母と悟石居士夫人の行業を記して一文を結んでいる。

それにしても、獨湛の母親が割股孝親の人であり、悟石居士夫人も掌灯

苦行の実践者であり、惟一道実も少年のとき病母のために自身の股肉を割いて薬餌に与えた人であった。また『黄檗第四代獨湛和尚行略』には錦袋円祖了翁道覚と獨湛の交流を伝えているが、了翁は羅切燃指苦行の実践者であった。黄檗における獨湛の周縁、それはすなわち淨慧の周縁でもあるが、そこに悟石居士夫人、すなわち在家の一族本夫人が象徴するように、苦行をともしなう信仰形態がごく日常的に存し、淨慧がそのことに異論なく、むしろ肯定的な考えにあったことは留意しておいてよからうと思われる。

(関口)

〔注〕

- 1 『佛神感應錄』後集は名古屋大学図書館蔵本に據る。
- 2 『黄檗第四代獨湛和尚行略』には「我_レ有_二一_レ別_二于_レ大衆_ニ若_シ問_ハ、何_ノ句_ト不説不説」とある。なお『初山獨湛禪師行由』『黄檗第四代獨湛和尚行略』は田中実マルコス氏『黄檗禪と浄土教―萬福寺第四祖獨湛の思想と行動』（平成二十六年二月、法蔵館）付編『獨湛全集』所載影印に據る。
- 3 獨菴は不詳。獨湛の著作については田中実マルコス氏前掲書に詳しい解説がある。
- 4 獨湛は獅子林に退隱後は、『勸修作福念仏図説』を版行するなど、浄土教に強く傾いたとされる。
- 5 淨慧は右に「ワジョウシ」、左に「ラシヤウゴ」の読みを当てている。



京都・萬福寺蔵 紙本着色 獨湛性瑩像 藤原種信筆 悦峰道章題

(田中実マルコス氏著『黄檗禪と浄土教―萬福寺第四祖獨湛の思想と行動』より)



宝永元年獅子林版『勸修作福念仏図説』を上毛西牧の帝釋山神光寺が文政元年に鐫刻印施したものを。(宮島コレクション蔵)

〔翻刻凡例〕

- 一、昭和女子大学図書館蔵『佛神感應錄』前集八卷八冊本を底本とした。
- 一、可能なかぎり原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻したが、「_レ」(コト)等の合字は通行の表記に改め、摺墨の濃淡等による判読不能の文字は字数分の空格(□)を置いた。
- 一、半丁ごとに丁数を示し、各話末行と次話題との間に空行を置いた。